序

芭蕉翁附合集ハ
翁の孫桜松子氏桃隣
法集ようをくをもとして
文政辛巳乃冬海内より
いまゝ拾切の俳諸平
及ひしてその人数かうをぬ
よりて好士交かこよ祭

写して文字言葉の
あやまちなかるべ
くも冊子殆牛ハ汗して
情をのべためも物し
なれて吉年の妻より
折〳〵嘉礼併白のこと
接華して天地乃
祭〳〵壱と年 大ま我

於系主人の補助とも
宜書何人多と学して
路よ接合清書ものひ
樹木ひうつせ書と
たりぬ毛と中ハ百ハ
閲しあすに熟読
ものかの〳〵ハ能般
能集紙数能法の

一語あらん

雪中菴蓼太

安永五丙申ノ季秋

凡例

一此集は一世代俳諧と選の極るの次歌の沢或八言負ホ宗因の余風なるの歌法集ホもつたるも又多くの新角一後編の時を待るの為

一集中書ホ書の俳句ハ可り少れの集ホ出さるもさこう

[illegible]と義水因猶その舟
[illegible]と侍[illegible]と謂[illegible]て加ふ
一 立琴ふ兆の絃忘貝ふ妹脊の
附白八義乃低[illegible]より[illegible]る人丸
相[illegible]を[illegible]を[illegible]の玄妙[illegible]ふ
位あれ[illegible]と加ふ[illegible]この白義ふ
あ[illegible]と[illegible]葉ら罷[illegible]
一 [illegible]の[illegible]て[illegible]線百白語と

あ[illegible]ハと対し山ハふふ蜜棹の色の
美ふ歩く[illegible]この白[illegible]こ[illegible]て
変白ふ[illegible]る事と[illegible]
風ふら伯和集と嘲[illegible]のち
伊賀の相面[illegible]の選[illegible]蜜棹の
色と[illegible]義集中ふ十負[illegible]に
義の附白[illegible]て[illegible]ふ[illegible]
今義用蜜なる事と[illegible]

よりて寛文ちとせの秋この集中
又誤脱のうたの一首人丸と
たしのべ
一編集みるに一栗を菊の
葉の一葉に紙数百枚没後栄
名幾なれこそこのこいかん
元禄七年九月廿七日女亭の
無り

一この集を法眼より出る
冊子のうちより抜加えるか
うたは脱もの天和より
元禄七年まで流の風潤を
もつてなるべしとなるべ
句我門弟のお遠あらん

芭蕉翁俳諧集巻上

服部松尾

伊賀国阿山郡

人生七十古来稀

詩あきんとまと含る酒債(サカテ)哀れ

冬ごもりこれてこふかる郷

春月中都(コウ)のつりゝ月忘て

冬の虹ひ乃あきまちうる

桂堂宮と余れやうとし
行一住二の夕 見つゝゆく
餞別
時雨秋去みとちめ一語のはと
厚ととしてふ雲乃月
仁戸惜んかうんいく志ゝ
蓮橋の雲よりかゝる月
志ゆうふ恰とせ雲おの猪
一枝ゝこのまゝ ふるゝむ道

時雨しふ猪信雲の居
火燈の朱よ俺と行ぐ人
挨拶
芭蕉みちを白よ菜魅翁よう
月と紅葉を酒のも食
箱まいせん雨りゝ八秋の乳
芭蕉と志ゝふ風の破笠
花の咲分のゝ菜義の郎
秋ふ志ゝ蜻のゝつと道

所の梅むら拾ん赤乃ゆ
きさしに寄れ花盛に十一
寄の宿れ旅人なと思せや
古人うゆの歌乃ゆかし
なまよ赤梅まゝ
笠きてやさ庭の和れ宮
めつゝや紫れ中の義
清士の影とゆれ乃梅

紫雲寺
藤原の寄を乃ゆる藤
袋や伊吾古れ宮に寄ゆん
砂さむうゆゝ家思のあと
いろゝの名もむつかや玄乃仲
うさきて妹乃美ハ美ゆる
ゆ寄ゆよ家宿せゆゝ彼ま敬屋
清美ゆゝ乃風の薫

和うの妻よ妻よ乃能妻

田植てとりに藍の紀

百姓もちつるゆきかくびびや

酒志ぬうふ此うの月

青海て天せそや美濃丸田植唄

笠行くさめんふ破のちらふ

天せそやかるとちる新の畑

その妻と笠よおんゆよ歌

時雨てやそやそうふ降る橋笠

宿うき妻を妻をむるそう蚊

奥座もるくてそ木の精うふ

小袁に首のうこくこの虫

とまもさびよ物ようの奥乃義樣

菜の湯よ物表雪のひよる

わう搗能割枇杷の廣菜ふ

兒にうこう山茂乃兒

梅ちるやうの白雪ふる
むらしの白雪は出葉なるたく
はくと板の花は神なるも
ひとと葉と摘数の多しかな
樹せよせ来ぬ宿は出雲者
秋を出めくるく秋の時雨
時雨の雲とかくる雨は秋
海苔うく苔の穂はうへ

書のねもかいつくろひぬ初しぐれ
ひとと吹風の木は葉をつまる
市中八をの宿ひやうの月
墨〳〵と門八のうを
所汁桶の水やをりをとり氏
油の花をうく青森をる秋
黄出ようこ葉を蔵る柿の実
屋の蔵うこをる卯は花

冬さむ菊は濃もなりや生大根
冬さむ　　霧ふる小窓の蜘蛛
素風や麦は中ゆくあらそ
陽炎いさむ　花の糸に
菜種かをもりの陽やそ涼
菜畑ゆく　豊陽花のむ
幟　　ふるや初秋の数の乳
菊もらう　吹帷子の皺

新麦はさとさとめぬ金乳
まゝ　　お蚊屋は乳をるうなり
帷子は　ゆくよさ庫鶏の声
蚊一番　と稲のさき　貌
　　何まゝて未を海ゆくみふ
霧の別　らとあくる栗の穂
　　残る蚊よ拾ふて寄る秋を乳
解春　ものゝよ　ふる涼船

秋のくれ月出るまで居る船
萩よ森中の萩よ森中の
夜更け花咲よりも更の縁
豆の葉の銘のそこ迄海川
猫のふりまこる雲の松霧の
日吉宮ひとつまつ寄る
業こそ郎
詩あきんと酒と食る酒債の郎

月出るまで
手拭さて夫よ実をゆるきん
初雪の古くも稀なる
雪ふりもこる紅葉の版
菊まこる様の祖形まて
小仙八尺百に雲を
宗のく細目よりく業且
象猫よりく猫逃る時とく

梅さくえてのゆふ　梅いま盛り
ひとしの宗匠　桑子たく
桑の中より遊れ歌乃並ひ居る
亜栄やちくより藤も思ひ
雪とりてかをとれそうの松
梅士のるう緑と若る見吹て
義の陰ゆさみの花めつらしや
形ちやゆ　掃んの幕末

七夕の八ハ八ものさひしくて
小傾城ゆきてかうん寺の書
既中ようふ仮乃たきのの
吹きうきて袴の初されあうくて
ちくぬ程乃六ちくまよ仲の唐
吹とうつ書に色れうくひを
一重の仕事八書ふおさゆりて
唐ちもちけうの学をかくびちや

西志ねうゝゝ出るうの月
蓑をうの西行霧屆ふめでたゝん
蓑をうして栗の花さく沼尻哉
いつまでの外よ時出る梓
多胸峠よ紙ゝ和面よ月晴て
茨ゆうと又智しらかつを外
市のうゝ供外茶ゝる細布
はおりてふ釜とゝゝる涼して

法皇よ客と云のつくをさふ
綿絃ゝ如をむさの里
みをしたくねる階ゝの稲とつゝしまて
苅揚やゝ小田のう一丈秋外
蓑うゝる日よ代の曲る　戸
夜うつ梯ゝ馬のさむうまく
ゝまゝれ盃よ桃の花書ん
勝よのせゝる琵琶の水うし

宵の月うく揺る岩に霜置て

新麦ハつゝとをぬを途れ

ゆゝしく お坂屋の定ちゆゝ

馬吋の色て淋しき牧乃秋

雪乃松ゆきに乃きハ松をし

ゆの出るまゝの赤き色定

下番と一松演ゑ歩ゆく

雪ゑ今りや小牛の足丸茅

笹の雪ゆるゆうつきの松

ひと番霜丸雪て揺る松弦を

松板ゑきくひあけるみを氏

雑松乃一筋くさ由る美雪

ゆゝゝゝゝ小孫る折ハ丁子風吉

いさみ立雪ゆゝて由る嵐の船

冬のまさ氏乃雪ゆゝ光

大根乃そゝぬ古にふくきて

牛流れて村のさハらやちつき五
きを葉ふき切　梅檀の花
一まいの蓮ふ豆葉押ひろめて
葉かくるとさい毒出て氏の異さ
ぶ雲ゑ採の時言ふこと
歩り荷物ふりの人と咄しき
うぶり稲の穂ふ丸旭ふ
戸もくふまん泥地の高

白雲れうちうり張弓そめて
松風ゑ新酒をきき新をふ
月もうくふくゑ垣のうへ
町の門出ゑ廉乃花誠く
四句目
歯栗の葉と初物人の矢ゑ負て
北の市門とおしあ事丸表
田螺口ゐる絨の童乃おそふ

公園より帰るとて井の中うち
か（る路の（らぬ路もさハ立て
七曜山と出こゝ　月
出せきて至孫の石やる幾とん
篠すゝ鈴ハ声生うとし
月出よ関屋とかゝん酒りもて
民の竈ハ寒る秋　この砂
村面よ市の仮屋と吹うて

町の中ゆく月をの月
旅人の風かきゆく素著て
うゝも者ハぬ太刀のひさゝう
掃よせて流る雲やかうん
石の窪ゝ星を掬ゝ
投うゝて迫の編格旁こめて
風呂焚にゆく月の出かの
地屋敷の火縄もゆるを陽を

山のかなたに月はさしかゝる

數入ハきく數入と乃せ乃ゝ

なくさみかゝる　節　拍く

夜乃ハれゝ　橋と掛てゆく

門ゝ　歌出る月のたそかれ

秋風ゆゝしく合ねと吹立て

追ゆのうちへ　ちる生ゝの

哀　善法と去れなるきゝ入れ

上のたよりまよあげる茶れ也

又向目

霧乃ゝる宮の月かをうく

風吹ぬ秋れ瓶ゝ酒ゝきゝ

橋　笠ゝ夜とやつを紀伊西

浪ゝ　恰うゝん月ハうを

七曜山を出うゝる月

所　伝り乗れ古ぎる砂をけ

酔るくハ人の肩よりはなく
ふの笑れいて面白や袖又ゝ森
いつゝ立ぬ一の絞る蓋うせ
眠るゆゝ馬のつるゝぬなゝゝ
皆よはさまる石原の家
入月の落化粧る武蔵ひとる
門よ散出る月のたそゝ
ゝりも秋のゝくせれぶんさ淋

嵐よたハむ毎の細ゝさ
柱本屋ハ柱本よ影をかくすゝん
たぬきとおどを藤法の弓
まいゝ戸ふ皆這うる皆の月
戻うちたくうる笑一枚
去の筋ハ根も足ゝふ自由さよ
ゝ屋く焼十ゝのさゝつな
子代強ゝるゝのとさ面くゝ暮して

除仏事する業といふく
弱りあげるとやうてゝ紙の月
赤市三人のたゝる夕月
水力の旨吟えゝる居合ぬさ
とのたゝるあげる茶北西
宵のうちばゝとせ一月の宵
そつとのぞけて酒の宮中
森ゆる待も森て居ぬ宵の月

元ゝる月花拳白雪か
いゝるゝゝ風雅ゝ言ゝ

琵琶法師面ゝ鈴の対面ゝ
朝ウゝ忘ぼゝとゝゝ紙衣
蓋しゝ退ゝゝ肝亮と案
富ゝるゝゝ称ハ蓋とゝゝん
波蓋法師ゝの上と次
鈴鳴ゝ西風と猫衣遥ゝ

棹いまだ新ハ白き乃前ま
清所ま故郷ゆく世を夷之
山ゆ地ま仇ま勝と貪欲
盗ミ井の月ま伯夷ゆ見洗ま
曝乃森ま毎ま海さんま
洗ぬま発んなまんゆまま
指新ぶる第堂の新
寸法所切の夜ゆみゆまま

月の袖かうろき臨る孫のうへ小
鵬の相ま出る秋ハ原きま
孤ま秋ぬ俗と勇ふ第蓬
ま秋ま山滝傘を舞
毎年のごとくと蓬小深ま
特場の雲ま第屋と悲
一の姫里乃庭家ま書れ
新谷まつと云歌を夷乃

時雨の哀と時うつり
うさ世を泥む色食の被
岩ハ花貪婪さん婪さん俵
芭蕉ゆゑの嫁ダンよ
腐るまうい犬もくらふや
舞入のをはくまふ初きぬさ
ひらひんで蔦うつを思
鳴る芙蓉を小紫と褥ル

馬鹿〳〵おくく女ゥ乳
枯藻撥髪螺の角と壱打ん
魔神と使ととを荒海の濤
識れ弓丸猛き世ふ出よ
虎ふとてろよ姫ろのうき
山高〳〵白鷺の麻とふく鼠
うゆ〳〵火性き指乃竹
石瓦玩績よ色むあやく

名いうよ京城地のがく吹調(シホ)べん
みちのくに夷ぞもぬ石白
武士の猩乃血染まらうを
行商人花と金表酒債乳
揚白　芸術いくれも興ゆかるれ
庭のうを火ぞ焚たそも
う称めて玉ぞ緒のうち霧色
お待ちぬ宗うり枝咲く松

傘の絵をかくうらかるて
点とぬ孫金山の奥深
志田たりと白風葉
繋うつるを物乃
猫の恋ふ郭文集と書絵り
風の言ふ蘇孫のいろめく
大い恋ふる庭北言掃
みちとのるから猫くの声

袖織紅の紙ぬおさまて
世中と画よのうきうる業の種
妹うかしらのかくとやさしき
業とはさく園の紅風
津の国のふるはとあうて
隈こりさまをとるまそ常
吉原のたるにるれの松ひん
家唐八湾ゴ富貴あくまき

髮ちやをとまとまのふ
さえぬ卒紅葉ゴをぐくと泣
紅ぐれあうつきくく火を焚て
この尼ゴを清の紅蛍さく
妹をむくくとうう巣うむ
いるて恨れ矣とをつ声
盗人の紀念乃松の吹れて
あらまさの遠まとけ時る

秋の一夜半ばうちたくを敷て
中よ水樓とくるむ琵琶歩
年の切なる面影のゆかしれる
床ふかけて酒をいとこなる男
縁さ面をけの姫のとなり
明日をかくれる首おくりせん
小三吉よ盗とせむとしりさひ
指南ふ候をゆる福中を此なる

当紀よ　紙帽子をかぶ
三味線かんふ彼の実人
乃すのうち屋て寄りる碁と云
月よたてる夜編の鬢北帝枯
無せぬさめる隙海とまう
義の実法京ふ京ふちり
被より砌をとりさ山陰より
灯籠ふる情くなる

寒菊を摘み力と撰まん
きのうきつ津波の水に流きり

仏恰くる　奥解き　名を
ゲン　ゲン
ゑ形をうれ乃　扇　白反

うけは　嘯る　寒　ちりくと
言の　粗　長の　玉　丸　並めつ乃き

猿　ゑ　ゑ　旋う　片　紬　と　と　く
夢　ゑ　の　一　を　ゑ　ゑ　と　言　を　稗

揚句

二月乃　寒　を　晴　く　達　丸　て　ゑ
ち　う　き　光　竜　花　ゑ　う　け　ゑ　入

ち　の　を　丸　も　銭　象　も　ゑ　う　く
拾　て　く　ま　る　う　鈴　の　新　き　ま

火　と　う　ぬ　火　雑　な　さ　人　と　乃　ん
ま　ま　け　納　豆　た　く　ゑ　ま

花　ゑ　豆　楊　の　鶯　と　す　て　ふ　け　る
西　南　ふ　桂　乃　花　の　法　良　む　時

葉のあるうゑ少うゑい昔
てみを向ふ無常の変
寅乃ゐ北旦と雅治の急(トク)記て
粥を泊あうはき花よかこ南り
物哀の下よ淀ふ主風
砂とる童景切ていく
秋の民族丸ゐ連歌いとうよ
なうふうき山橋よさくゝ乃ん

麻うゑ
義御興ゆるを水瓦の山ゐ
骨を乃て燃ゝ用くゝ寸うを
苔よあまの小切変りふ寸むを
おゝ蓮の実生てる茎の実
豆腐作りて毎の喪ゝ入
元改の第丸祓も破ぬ屋
ひゝを書を乃る第の戸丸中

二丁ばかり西へきぬされば西の
板の風呂屋に至りて
をきて炉の傍ハ猫柿もきて
小僧ふたりをかこひをる
紙鮮の絵書の看板
亀屋ハ多紙を持る矣ひより
京司ヶ妻ハ[illegible]れてゐ
八月ハ鰯の売れつる

ホこの根を笠にしてるホ柔かうう
月細くたゝ幸の雪さ八ッ明て
搗（ハタラ）いてゝ　陸うゝの家
う鶯の賜ゝ扇　伝りて
紅葉の唐紙ゝ花の香を綾
酒飲む　姉のいうゝ淋さ
双六のうゝと毎ゝ手つゝ
髪下を付ゝ振おゝろゝて

此の文ゝ　枝まゝの紅
藝者と　当ゝ　五月　北冥
面白の姫女　乃秋の秋ゝ
川風の誓を角ゝ結ふゝ
金利ゝ　陸　鶯ゝ　紅ゝうゝ
花織ゝ　陸を分ゝる　桜　屋
ゝのゝみゝ女ゝ　鶯おゝを分り
咲ゝ　竜のい　元の　さゝ

三ツ段のうへ　除月の歌

花遠雨　弁こさの蕎麦

いろは唱百千舌ハ吹矢と負ふ

月ばかり　歩板山と負うん

雲を歌　盗の沼はむこ

歌うち　兎の風吟ふ書

笠及歌　人ハ峰ようちまて

風ふく　大重九歌のセツ字

御門とくもくせ鉢の奏

宿の古庵ようは捉ると拓

ちはかりに初の連歌手角

鳥拓おれ髪切ル女義ようて

庶と及ばや妙ル　紅葉の月

陰子仏樹期のうつ這ふ乃

笠持て　庵ようと　歌　癒男

うちつく　蕎の香とかつく

名ゆえ君と深窓よりゆく
入口の松風ものうし
交ものう他花つも花の奥
落を切て告るふきりう
蹌踉頁ものく庶少よ入籠の隈
俺かり海く椽のかゆ黄る
文級出里のきぬさと歩よ面き
寡霧く溺れるの血

坊主も老もいとく近ッ立テ歩
ちの勝ちく神事おろ絡
生際ゑ越つく烟面とたも
いくれて銭ゐ松ゥ切ゆ
赤白ゆ近ゐき仮を作き冥
洞ゥ新とうこと貝茱
舌根ゑ系仏を庶ふ居士夜
小城ち稲の中ゑ作く立

杖をうち捨て庭に立ち
いさとふらんやおち拾の月
芙蓉に姫根と寄り嵐宿
ひ浮ふ音は 秋の下葉
月のうさも書よの天徒と去立て
和泉 ノ国の ノ 桶の水と
紫恒のふるさ物を破きも
凄もよんさも 旅ハ思ハ不

を志の北思ひて思せる秋の風
餐切 宵の月をもうめく
もつ〻ち西北の松間て
粥よりまるハ何と吟ん
山菓花の後を伝梅桂
言小鞠 遠ノ人 奥ノ馬
やとり せん大江の宴ハ八百象
制厚ノ ノ 状名の墓

伊豫板も先祖八幡宮の御法
冥祈の枝葉神も虛空
記念塔も拾をたてゝ
絲の柵ゆ書を添て
書の石碑の紙家さゝやう
歌碑せ事ゆ松の声
碑の利井ゆ月一茶
反古ゆ福ゆゝゆる紙ゆ

ゆゝ眉をかくゆゝぬく
弥勒の堂ゆおもゆ
行ゆの法を蓮ゆる茅の中
京ゆ仮ゆる碓井此ゆ
玉川やゆゝゆゝの不尺て
候つゆたゆの廣繁ゆ井合せ
贄ゆ罠ゆ秋ゆ三ゆ縁ゆ
姉行年のおそきゆの新

絹あり綿の縞と織りまて
ほのぼのとさとあけ渡ひたく
卯月の雪戎橋あたくるも
たりぬ事を訓ふ傀儡
途中よたてる車乃簾と捲く
老の身乃縄なふ程よかそりる
玉流さまして　世の実ち
木の葉ふちる板の東も秋立月

つて行ものゆる浮のくひもの
簑とくむとして森ぬりしる
火ぬりして行るものこハ何者そ
さぬ〳〵れ言うりを月の新
人一代の　立をうふ秋
下戸を多くめる宮の秋亭
平咲乃むめをつの方にきそ
ぬやとさ秋とそそうう脇立て

なふと時はゆくかとそんやう
ゆふせんは名月とそうまやも
蕎麦のみつさと函を買る
福つゆの光てあれを年投て
世中のとのれ片袖とそく
夕りつかるを信表初人
命をとをの速安を懐る
はハテて初る舟うく須戸の浦

日毎ゑゝハる家と荷いて
乞食をうらふ猫の木ゝ中
変して変ふうゝ月もうゝ
目前の乳父の傍話る他
八つゑなるゝ郭清けるり
小細さりき楽山る他ん
等の戸北るを伺侯ゑおさんらま
阪家中出の女ゑ更りゐん

代りて出る海苔をふく
敷白の言ゆかぬ多いさ
月と見しる　螺の沖
辛螺かの油ふうあ落ぬ
角ある眉　化粧する者
あさくちの茶の出る月に
標下に頭ふ　海夕ぐこ
初月ゆ里の妖光引逃ひ

落ち　ちく　荊　袖　引
ふうふ　ゆ　赤　的　方に山尺て
種いくさ　ここ　後　西　赤　赤
なみさとて　鄙の　形
鼓　夢　浦る　態の　池乃　ふ　流く
う　紀　多　ふて　ぐ　ち　ち　消　ぬ
又の軍を　紀　ふ乃　美
三度　ふ　ふる　物の　古　恋

山ざとの車よ事清水を荷ひ
屋やれて月ハむかしの新かつら
老のむかしうたう夜うし書
石地辺の松よ一唱志めり盃
七妻の樂ふ嘗と投迄
燕うり短冊佐事て敬中
亀盞と脊屋ちかこ
琴ゑさ事ふ言よ〳〵ハや

打抜るとて菊の名と忘迄
酒よ無ある友を集教
ぬけ初る父の一盞乃かるくて
ふるハ豆も孤のさ伯雪く
花ゝひ来やと伺造〳〵
白ゑ物妹の垣と花絨を
結ゝと桐の柱よ筋遠く
調ゑ記念乃敲言も出し

何も焚火のうかれ心を
深掘をめし　裏の藪陰
木兎とのの孤や峰ぬけん
夕を見れば燒畑の煙
牧こうしゝる小橋を渡る
永遠の事て蛸ハ哈俺
青空ハ蒸ける神乃文うつし
寺とこそ留も花の本陰まて

渡るも雲
秋晨たゝ亞也の上
竹の新めつゝしき紅の文結
いろ雲の遠も走つ色さうを冀
琴琵琶をうゝ出る案内
除物こゝ下る岩根路の坂
宗雲の憂寸白も筆丸記
勅撰ハを稽る秋と寿うゝを

贄の白髮をとゝ和尺角ゝり
家敷より栗の実のこぼれたる梨子の苑
孫より数　妹とは者　盃
藁ゐさ里ハ心とまゝに
栗稈と　口毎の秋ゝ咨儘
山秋も門の板橋霜を乾
敬免よりもしく乞とり乞る月
をとゝの廓ハ畑より焼ける

今狼の芸も一分よりあゝさゝり
うの雪に山畑をとゝ和答揚て
森豊ふゝ〳〵ふ化粧美
蟠年の売と路ふを吉
分ハ機又あるうと美ゝ美つゝん
ゆをつる月を物の点ゆ見て
出温泉ゆ美へ表陰奥乃秋風
ゆる時ハ悔も美ゝ入ぬゝん

樟の小枝より点を屋さて
富隆山や白髮おもうけ
伯耆ハ軍と遣れ寒よ来て
彫刻書を車えと飾の行あて
ものゝ武士のそこの宿
文ふ石まて浮名和
ふ枕ふ細さ紙とさし入す
伯耆つる宿の枕月と又

落ちゝ
をふはくらの声ふ出くて
鶏さや陽もをく来きに
花をさるふ桜りと寄く
伯の迷ひのさもるる風
る市くを弱遅せん
繰けるる又ら号幕を元つる元
富隆ぬ松ハ已と妙ら名

萩露志けるる独の書
庵洗りんと雫そそくこ
菊花のこゝハ夜と思せる人
ほゝんの事風ふかゝこ
老僧のいとて小盃をめんと
秋更て捨るる僧菊の盃
うゝしきを思せる夷の谷組
市城のすそそるゆる毎火

寄る仏市乃音も跡をそく
年のるにんぶくさむゆ百蕎
面壁年ゝ如ゝろの此
松むをひ亜ふ乃境目
永系のたきち仏をいゝ記て
捷上る蕎麦の這入ゝ
ゝゝ人る苦る秋の勢
但樂いとるむ山陰の捷

探多村ハ浮世の外ハ雲冨て
早桑る髪ハ白髪のつるを
集りて経女の名をとゝむ月
宗うをゝ出うゝ家浮之者
祈ふ咲末法と至の番乃ひる
言みをゝ師走の市ハ名幾て
繁ゝ紀のりと茅唐の宮
やをゝめ為のまゝふ咲徒

平清ゝ盛も誠色ゝ紀ハ軍
敗くゝる恨の思ハ指つきて
徒ようつる家ゝひ新
妹の母ハむ憐婦の新
生面ゝ髪る鬼う俗まて
衛乃ハ道のゝきまて切せぐあ
牡笠をとゝる武隈の古庭
ちゝの秋ゝ行るかゝ玄

市住して尚ほ寂寞を無聊ならん
知つとめ書常なの猪牙音
ふも金と爺乃も合
おかるの姫丸森不の月
ものいふ木魚よりくまの月
棺をおさむる塚のあるじ
神奈川ハよりまさと化粧ん
望志ものん戸と俵よせ垂く

月さへ清き陣中の市
小袖袴と始れ戒の作
家ろんの母よ似るもゆうて
紫衣はれ京おつえる古今集
花より財ある坊の河義
蚕さよ動きて幕ふよれ
物来とはくつて古き恵とんん
眠てハ至の猪ゲッ望ねさて

百里の旅と赤岩の平遊
至うさぬ秋ハ何とすく鬼
古仏新と成るよりる桂皮薯
月欠と引紀されて知さ
髮何人かすする蓬の翁
的場の赤る咲る山吹
去と踏しセッのまつカス
かさ陰る美ハ独中北地蕗

書こしする山火のうこ
ゆるれとろく作義の定
盗人なつきこ妹ゥ牙と注
義の墨俗北編細ハ俗
ものいくこ小豆ゥ赤を押入
盗人こりき二十品の里
松の根ゥ後を知ゥまこん
あ北月も立ゆこう雑八遠

高きもきえぬ　泊の痛さかな

おろかもと捨てすてぬ世の中

酒呑て芸の朽木も仏なり

同　地蓋ふ義るるなり

雪の業かは猿の腰や落てん

ものもと漂て流人業外

ものも又朔日と詠むなのうち

芭蕉翁俳合集巻之終